

## 誰が、何が、女性を追い込むのか

古居 みずえ

2011年東日本大震災で、東北の多くの人たちが家を失い、家族を亡くした。日本は災害があったときに、学校の体育館などに避難させられることが多い。人びとはそこで数カ月過ごすこともある。避難生活で、女性たちが苦勞することは、仕切りも何もないので、着替えが出来ない、授乳のときに授乳室もないことだと聞く。私は長年、中東のパレスチナに通ってきた。避難することは多いが、避難する原因が違う。それは地震や津波ではなく、イスラエル軍による爆撃のためだ。イスラエルによる占領が76年間も続くパレスチナのガザでは、数年おきに攻撃がある。避難するときはUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の学校に行くか、親戚の家に身を寄せる。

しかしながら2023年10月から始まったイスラエルの攻撃は、今までとはけた違いに大規模なものだった。2024年8月半ばの時点でおよそ4万人以上のパレスチナ人が亡くなり、その7割は女性や子どもたちだ。亡くなった女性たちも地獄なら、生きている女性たちも地獄だ。2023年10月、ガザには5万人の妊婦がいた。お産を間近に控えているのは5千人と言われていた。イスラエル軍はガザの病院をことごとく壊した。11月、ガザの北部のシファ病院はイスラエル軍によって攻撃され、燃料不足と停電で保育器に入れられていた赤ちゃんが次々と死亡した。最悪な状況は、妊婦の女性たちが麻酔なしで帝王切開をしていることだ。電気もなく、麻酔もない中で行われる帝王切開の痛みは想像することもできない。避難所やテントの中での出産も多く、出産後のケアも行うことが難しく病気に感染する赤ちゃんもいる。早産、死産も増えている。

難民キャンプで知り合ったお母さんは、ガザの家庭は多産で、たくさん子どもたちが殺されてもまた新しい赤ちゃんが出来るから大丈夫だといつも私に話していた。しかし今はあまりにも状況が酷すぎる。一日も早く停戦をして、イスラエルの占領がなくなり、幸せな日々が送れるようになってほしい。



### PROFILE

ふるいみずえ：アジアプレス所属。1988年よりパレスチナ人による抵抗運動を取材。女性や子どもたちに焦点を当てている。2006年『ガーダ パレスチナの詩』（第6回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞）、2011年『ぼくたちは見たガザ・サム二家の子どもたち』（座・高円寺ドキュメンタリーフェスティバル大賞）、2023年『飯舘村べこやの母ちゃんーそれぞれの選択』（トロント国際女性映画祭長編ドキュメンタリー部門大賞）など。